

# 黄遵憲における日本理解の序幕

## 一、東来の法

一八七七年（明治十年）、中国の初代駐日公使の書記官として、「挙人」黄遵憲が来日した。赴任するに当たって、黄遵憲は絶句一首を友達に贈った。

如此頭顱如此腹  
此行万里亦奇哉  
諸公未見靴尖耀  
待我扶桑濯足来

此の頭顱の如く 此腹の如し  
此の行 万里 亦奇哉  
諸公未だ見ず 靴尖の耀ぶを

我に待て 扶桑に足を濯いで来るを<sup>(1)</sup>

張 洵

なんとも誇らしげな詩である。新しく「挙人」になったばかりの黄遵憲のこの時の気持ちは、唐代詩人孟郊が、科挙試験に合格した時に「春風得意馬蹄疾、一日看尽長安花」と歌ったような颯爽たるものであろう。黄遵憲は大志を抱いて日本にやってきた。しかし、十九世紀の中国人にとって、日本はまだ神秘的な世界であった。黄遵憲の日本のイメージもまだロマンチックな文人の想像に包まれていたのである。彼は次のような詩を歌った。

避秦男女渡三千  
海外蓬瀛別有天  
鏡筆永傳笠縫殿

尙疑世系出神仙

泰を避く男女 渡ること三千

海外蓬瀛 別に天あり

鏡壺永く伝う 笠縫殿

なお疑う 世系は神仙より出づると<sup>(2)</sup>

この詩の後に、黄遵憲は注を付して、強調するように、「要するに、今の日本人は、実は我々と同種である。」と書いている。黄遵憲の頭の中にある日本は、まだはっきりした実体のない、中国の伝説に出てくるような神秘的な国であり、中国とは同文同種のものである。しかし、黄遵憲が日本に来て、実際にしたのは、明治政府の欧化熱であり、在来の漢字を軽視する傾向であった。黄遵憲の友人でもある三河石川英は、当時の西洋文明一辺倒の社会風潮について、次のように書いている。

最近の学者は、心がヨーロッパ文化に傾倒し、ヨーロッパ、アメリカときたら盛んにその学問を称え、文明大國という。しかし、中国については人材が昔に劣っていると、さらに盲目的な者は人材のいない国だと言っている<sup>(3)</sup>。

G. B. サンソムもこの時期を次のように書いている。

新政府は西洋方式の採用を奨励しはじめた。……常に反応が敏感で、新しい流行の大好きな都会の民衆は、ほとんど熱病的ともいふべき熱意をもって、この新しい方針に応じた。<sup>(4)</sup>

このような社会状況に直面して、中華意識の強い黄遵憲は、甚だ不満で次のように非難をした。

今日本は西洋を慕っていて、学者たちは己れを捨てて西洋に従おうとしている。ある者は、漢字が役に立たないものだとさえ言っている。<sup>(5)</sup>

黄遵憲はただ単にこの西洋一辺倒の動きに対して反発し、非難することにとどまってはもろろいかなかった。彼は中国の古典から多くの論拠を集め、西洋の学問の源は東洋の学問にあると立証しようと試みた。黄遵憲は「私は西洋の学問を考察したが、それは墨翟の学である。」と言った。

黄遵憲の詩から、この時期の彼の思想を伺い知ることができる。『日本雜事詩』定本第五十四首はこのように歌っている。

削木能飛翽鵲靈

備梯堅守習羊圻

不知尽是東來法

欲廢儒書讀墨經

木を削り能く飛ばし、鵲の靈を翽る

梯を備え堅く守り羊圻を習う

知らず 尽く是れ東來の法たるを

儒書を廢して 墨經を讀まんと欲す

『墨子・魯問』の中に「公輸竹木を削りて鵲をつくる。鵲成りて飛ぶこと三日にして下らず、自ら以て巧となす。」という下りがあり、黄遵憲はこれをかりて、西洋の近代科学技術は、木を削って作られた空を飛ぶ鵲のように不思議なものだと言っているのである。そして、明治の日本人が、このような西洋の科学技術を尊び、学ぼうとしていることを、黄遵憲は詩を以て描いた。また彼は西洋の科学技術によって自国を強国にし、敵国から守ろうとしていることを「梯を備え、堅く守り羊圻を習う」と表現している。これは同じ『墨子』の「備梯篇」から得たイメージである。墨子の弟子禽滑釐は墨子に師事して三年になって、やっと墨子から城の守禦法を教えられたという話がある<sup>(6)</sup>。黄遵憲は日本は富国強兵のために学

校教育を重視していることにたいへん関心を持っていた。彼はこの詩の自注に、日本では「学校が甚だ盛んである。ただもっぱら西洋の学を以て、人におしえている。」と記している。

彼の『日本国志』<sup>(7)</sup>には、日本の学校制度についてかなり詳しい記述がある。最初黄遵憲は日本の近代教育に対して、理解できなかった点が多くあったようである。詩の中で黄遵憲は「知らず 尽く是れ東來の法たるを」と歌い、憤慨しているかのように責めているのは日本のことである。彼はこの詩の説明に「このことについては、別に文學主志(『日本国志』)の中に詳しく述べる」と書いてあるので、次に彼の参考してみよう。らしいと考えている『日本国志』の中の一節を見てみよう。

近年来、日本の学校は門類別に分かれている。人々は奮発自強であり、国は富強になる勢いである。彼らは格致の学は中国の固有のものではないという。しかし、古人の説は明らかに存在している。わが国の學術が、他国に伝わったことは恥ずかしくないが、しかしわが国の學術を發展させた日本人は、いまかえってこれを強く拒絶している。そして、これを西洋の學術だと称すると、今度はこれに習おうとする。これは実に恥ずべきことである。これは事の事實が甚だ分かっておらず、数典忘古そのものである<sup>(9)</sup>。

黄遵憲は文化のほんとうの源が中華にあることを、認めないのは恥すべきことだと主張し、祖を忘れたものだと非難している。彼自身は祖を忘れていないつもりでいた。かれは長い文章を使って西洋の学は中国の古典にすであつたことを証明しようとした。

わたしの考えによれば、泰西の学は墨翟の学である。「尚同」とか「兼愛」とか「鬼を明らかにし天に事う」とかいふことはとりもなおさずキリストの十戒にいわゆる「天主に敬事し、人を愛すること、おのれのごとくす」ということである。そのほか「化とは微の易るなり、龍の鶴となるがごとし」とか「動物の變化」五行の水・火・土が離いて然え、金を鏝し、土に離く、とか「金石草木の變化」、「同とは重・体・合・類。異とは二・不体・不合・不類」(すべてのものの体質の輕重を比較して、種類の異同を分かつ、西洋人の淡氣(窒素)・輕氣(水素)・炭氣(炭素)・養氣(酸素)の説は、これに習つたものである)とかいふのは、化学の祖である。「均とは髮均しく懸け、輕重して髮絶ゆるは均しからざるなり、均しければ、その絶ゆるや、絶ゆるなし」といふのは重学の祖である。

黄遵憲はまだ長い例を挙げているが、要するに西洋の学問

が中国の古典から源を引いていることを一生懸命主張したのである。この観点は『日本国志・學術志一』にも詳しく論じている。その要点をまとめてみると次のいくつかである。

- 一、西洋の提唱している自主権利は墨子の尚同説である。
- 二、西洋の博愛というものは墨子の兼愛説である。
- 三、西洋の上帝を尊び靈魂を守ってもらうというのは墨子の「尊天明鬼」である。
- 四、西洋人が機械技術に長じているが、それは墨子の「備攻備突、削意能飛」の説の發揮と運用である。

黄遵憲がこのような理論を確立するために日本人と討論したこともあつた。彼は、中村敬宇に次のような手紙をだしたことがある。

私は曾「墨子」の中の西学と合致している所を書き写した。今お送り致します。先生の学問は漢学にも洋学にもふれているので、どうか、正しいか、間違っているか、判断してくださいれば、幸いに存じます。

そして、中村敬宇は黄遵憲に次の詩句を贈った。

嘗論墨子同西説  
卓識未經前人道

嘗て論ず 墨子の西説に同じきを  
卓識未だ経ず 前人の道くに<sup>(11)</sup>

黄遵憲が研究を兼ねて、上のように立論しようとした理由は、彼の言葉を借りて言えば次のようなことである。

日本にあって西洋の学問を慕うものは、おのれをすてて彼にしたがい、ついには漢学は無用だという。ゆえに以上の引用をして身のほどしらずの議論をする愚かなもの(12)の口をふさごうとするのである。

以上のような複雑な心の葛藤を経て、黄遵憲は詩の結びに深く感嘆し、新しく到達した思想を示した。

欲廢儒書読墨經

儒書を廢して墨經を読まんと欲す

この詩句から、黄遵憲が日本に対して抱いていた感情の強

い葛藤を読み取ることができる。一方では、彼は日本の社会現象に対して批判的な気持ちを持っていた。これは、当時の日本人々が、儒教に代表される正統的な学問を廢し、墨經に代表されるような非正統的な学問（日本人は認めていないにせよ、本来中国に源を發しながら、西洋の学とされているもの）を学ぼうとしていることへの不満である。

もう一方では、黄遵憲は明治日本が西洋学を学ぶことによって、社会を大きく發展した事実を目の当たりにし、大きく動揺している。彼は西洋学の源流は「墨子」にあると考え、「墨子」に新しい価値を見出して、これを学ぼうとしているのである。ずっと儒教の教育を受け、それを思想の基本とし、「举人」に成った黄遵憲にとっては意味深いことである。新しい文化、新しい価値を理解しようとする黄遵憲の姿勢がここに伺うことができる。「儒書」に対して、「墨經」は技術を尊重し、人の生活を合理化しようとする面がある。「墨經」の持っているこの面は、正に日本がいま学ぼうとしている西学の本である。したがって、「儒書」を廢して「墨經」を読むということは、つまり科学技术を尊ぶということになるのである。「墨經」は黄遵憲にとって、二重の意味をもっている。一つは在来の中国の固有思想の象徴であり、もう一つは、西洋の近代科学技术の代名詞である。「西学は中学に源を引いている」という考えに基づいて、黄遵憲は二つのものを源と流と

の關係をつけて、それを一体化し、そして、何の恥もなく西洋の學問を勉強できるようになったのである。黄遵憲のユニークのたとえを借りて言えば、西學を導入することは、つまり、

家に秘伝の処方があり、これが伝わっていく内に他人の家に消えてしまったが、のちにその所在が分かつて、千金を惜しまず買戻す<sup>(13)</sup>。

ということである。

ここで注目すべきことは、儒教の信徒であるはずの黄遵憲が、儒教とは主張を異にする墨家の學說に心を引かれ、理念重視から實用重視へと移行したことである。そして、これによって、中学と西學との關係、あるいは位置付けを模索し、自分の心の苦闘の打開口を見付けようとしたことである。

## 二、未だ著さざる書

中華伝統文化の豊かな教養を身につけていた黄遵憲は、外来の新しい事物に接触するとき、かならず自らの固有の知識のファイルを通していた。彼は自分の知識を正統的な儒學から得たものと、非正統的な雜學から得たものとの二種類に分けていた。黄遵憲は日本に来て早々、それまでずっと指導

的な地位を占めてきた儒教思想だけに頼っていては、もはや自國の停滞を打開していくすべの得られないことだと悟ったのである。彼の早期の異文化対応の様式には、ずいぶん幼稚なものも入っていたにもかかわらず、清末の中國知識人の中において、彼は異文化に対して相当柔軟な考え方を持っていた人だと、言うべきである。

黄遵憲は若い頃、「雜感」と題する詩の中で、「六經に使われない字は、敢えて詩編に使わない」というような柔軟性に欠けた「俗儒」を批判したことがある。儒學の限界を感じた時、彼の頭のなかには、自然に儒學とは違う別の中國固有の學說が浮かんでくるのである。かれはこの學說を外来の新文化と重ね合わせ、それによって自國の古い學說に新しい生命を与えたのである。このような現象は黄遵憲の多くの詩や文章に見える。先に論じた詩の中で彼の引用した「墨經」は、正にこの新しい生命力を注いだ古い學說の一つである。

次に、黄遵憲の日本の教育を歌った詩を取り上げ、異文化受容の際の彼の苦闘の様態をもう少し探ってみよう。

化書奇器問新篇

航海遙尋鬼谷賢

学得黎鞴掃善眩

逢人鼓掌快談天

化書奇器 新篇を問わんとして

海に航して遙かに尋ぬ 鬼谷の賢

黎韃に学び得て 善眩に帰し

人に逢えば掌を鼓って 快天を談す<sup>(14)</sup>

新しい時代にはそれに相応できる「新篇」を求める必要がある。黄遵憲のこの詩は日本人の海外留学のことを歌ったものである。留学して海外に新しい学問を尋ねることについては、日本が長い伝統を持っているが、黄遵憲はこの点について、次のように書いている

唐の時代、日本からわが国に使わされた使には、いつも留学生がついてきた。官制、礼教は何もかもわが国を真似ていた。いまは同じことを西洋から学んでいる。<sup>(15)</sup>

もちろん、唐の時代において、日本の留学生の求めているものは詩にいうような「鬼谷子」の学ではなかった。彼ら求めていたのは儒教に代表された正統的な礼教や官制であった。しかし、明治の日本が「鬼谷の賢」を求めはじめた。鬼谷子は中国の戦国時代の人で本名は王詡、河南省の鬼谷子という所に住んでいたといわれている。当時、名を成した縦横

家である蘇秦、張儀の師とされる人であり、智にたけた奇術師であったともいわれている。今日、彼の技に代表されるような「奇術」は、西洋に求めなければならない。「黎韃」は大秦国、すなわち東ローマ帝国の事であるが、ここではヨーロッパをさす。「眩」は幻と等しく奇術のことをいう。日本の留学生が西洋から奇術とも言えるほどのすばらしい学問を修得して、帰ってくる喜びを黄遵憲はすいぶん理解を示している。黄遵憲は日本が西洋の学問を導入することに成功している点に深い関心を示したのである。

正統的な学問とはみなされていない鬼谷子を、明治の日本人留学生が西洋から学び取った学問の代名詞としたところに、異文化の価値を認めようとする黄遵憲の努力を見ることができた。この種の曲折した認識の様式は、黄遵憲のほかの詩にも窺うことができる。

欲争齐楚連横勢

要説孫呉未著書

縮土補天皆有術

火輪舟外又飛車

争わんと欲す 齊楚連横の勢

読まんと要す 孫呉未だ著さざる書

土を締め天を補う　みな術あり  
火輪舟の外　また飛車あり<sup>(16)</sup>

これは日本の士官学校をうたった詩である。黄遵憲はこの詩の自注に「日本人は陸軍をつくるにはフランスとドイツを手本にし、海軍をつくるにはイギリスを手本としている。」と書いている。このような西洋の教育方法、兵法を取っている士官学校を描写する時、中国の古典に長じている黄遵憲は、すぐ自国の兵法、兵家を連想し、新時代の学校を描くのに、自分の古典的イメージを用いたのである。「齊楚連横の勢」、「孫呉未だ著さざる書」、黄遵憲は古い言葉に新しい意味内容を与えているのである。

十九世紀に入ってから中国社会は、内乱外圧によって大きく動揺しはじめた。一八四〇年のアヘン戦争では、帝国主義の大砲が、長い間閉鎖していた「天朝」の門を打ち破った。アヘン戦争の十一年後、一八五一年には太平天国運動が起こった。一八五六年には第二次アヘン戦争が起こり、イギリスの軍艦が広州の内河に入ってきた。一八五六年太平天国の残存勢力が黄遵憲の里に入ってきた。時に黄遵憲はちょうど結婚してわずか数日後だったのである。

黄遵憲の少年期から成年期にかけては、大清帝国の危機が日をおって深まりつつある時期であった。かれが外交官とし

て日本に来た時、中国はすでに半封建的、半植民地的な後進国の道を余儀なく歩まされていたのである。外交官としての黄遵憲の苦悩は相当に深いものだったのである。

黄遵憲の「齊楚連横の勢」は新しい時代における国の軍事力をさすものである。かれは中国が強くなることを切望していた。そして、これを達成するには「孫呉未だ著さざる書」を読むことが必須だと言っている。ここの孫呉に代表されている中国の固有の兵法にない書とは、西洋の兵法をさすものである。黄遵憲は客観的な態度で西洋風の軍事教育を評価することができた。この詩の自注にこのように書いている。

西洋人のよく言う言葉に、将校をえらぶのは兵卒を訓練するよりも難しい。兵卒は数か月で訓練を終えられるが、将校は長い年月をかけないと、ものにならない、とあるが、彼らの軍隊が強いのも、もっともである。

黄遵憲はこの西洋人の言葉に強く共感しているようである。自国の深刻な危機に直面して、黄遵憲は西洋文化の長所に目を向けるようになった。そして、「孫呉未だ著さざる書」という表現を使うことで、中国の伝統文化にはまだ成し遂げられないものもあることを認め、謙虚な態度を示した。自国には足りないものもあり、それを異文化から補足してもらおう必要



性があるという認識は、前の詩に出てきた「読墨經」と比較した時、これは黄遵憲の一つの進歩であるといえる。

しかし、ここで到達した異文化受容の認識は、あくまでも西洋の実用的な科学技術の導入に限られている。黄遵憲は、西洋の学は人々を互いに競争させるように働きかけることを見て、「私はヨーロッパ諸国では百年以内にならず大乱が起きると思う。」<sup>(17)</sup>と言った。彼は全面西洋化を主張する人ではない。彼は中国の伝統思想の中に国を安定させるものがあることを強調している。彼は儒教思想を実際の行政に応用すれば、多くの実りある結果を導くことができると考え、儒教思想を綱として国を治めるべきだと考えた。彼は「利」のあるところにかかわらず「弊」が伴うという見地から日本の社会を論じた。

韓子は「墨子」を使うからその善をあげていう。孟子は「墨子」を排斥するから、その弊をあげていう。日本の学術は先ず「儒」、後に「墨」である。だから、私はその利弊を総じて論じる。<sup>(18)</sup>

黄遵憲は自国文化と外来文化の関係について、「主」と「輔」とをわけて考えるべきだという見解をもっている。彼は「格致の学はわが国の固有物ではなく、謙虚に学ぶべきだ」と言

う。しかし、彼は西洋の学はあくまでも補助的な役割しか果たせないものだと考えていた。黄遵憲は「彼（西洋）の法を借りて輔とし、中国の才能と智慧に合わせてやれば、数年も経たないうちに、彼らを越えてしまうことができる。」と自信満々に述べたことがある。黄遵憲は、明治日本が西洋に立ち後れた原因を儒学のせいにしてしまうことに、強く反発した。彼は『日本国志・學術志一』のなかで、次のように断言した。

唐代以来、本当の儒教は日本に入ってきた。入ってきたのはただ「辞章の末芸、心性の空談」である。これらの儒教の末流は、実際には役に立たないものばかりで、西洋の「船堅砲利」の攻撃を防ぐことはもちろんできないのである。

ここで黄遵憲は本当の儒学は有用なものであり、今の世の中にも役だてるものだと主張した。黄遵憲は儒学の有用性を説き、かれの思っている日本の「先儒後墨」のやり方を非難した。かれの説には牽強な一面もあるが、このような日本批判によって、かれは自国の伝統思想の有用性を説き、中華思想からの自負心を満足させながら、西洋文化の実用的な部分を取り入れることを試みたのである。

以上見てきたように、黄遵憲は異文化対応において非常に

大きな心理上の苦悶を見せた。かれの早期の日本理解にはいろいろ限界もあったが、彼の異文化受容の序幕はここから始まったのである。

註

- (1) 『入境廬詩草』卷二  
「将之日本題半身写真寄諸友」
- (2) 『日本雑事詩』定本 第五首  
（以下『日本雑事詩』から引用した詩の訳は 実藤惠秀、豊田穰氏訳『日本雑事詩』平凡社 東洋文庫111を参照した。）
- (3) 『日本雑事詩』三河石川英跋
- (4) G. B. サンソム『西欧世界と日本』下二三頁 筑摩叢書
- (5) 『日本雑事詩』定本 第五十四首自注
- (6) 『墨子』下七一八頁 新釈漢文大系51 明治書院
- (7) 『日本国志』卷三十三 「学制」
- (8) この第五十四首の詩について、黄遵憲の長い自注がある。原文の「凡彼之精微、皆不能出吾書」を、東洋文庫111『日本雑事詩』八九頁には、「およそ、西洋の精微なものは、みなわが国の書から出たとはいえない」と訳している。中国語の「出」はここで「離れる」、「超える」の意味を取るべきである。そうす

ると、「およそ、西洋の精微なものは、みなわが国の書から離れることができない」と訳さなければならぬ。この言葉は、当時の黄遵憲の思想を究明するには、とても重要なものである。彼はすべての学問が中華の書の中に入っていると思っただけでなく、「知らず、尽く是東来の法たるを」と歌ったのである。

- (9) 『日本国志』 八〇九頁
  - (10) 詳しいことは、東洋文庫111『日本雑事詩』 八六頁を参照
  - (11) 蒲土典子氏『黄遵憲と変法論』（論集『近代中国研究』八二頁）
  - (12) 『日本雑事詩』定本 第五十四首自注
  - (13) 『日本国志』「學術志」卷三十一 八〇八頁
  - (14) 『日本雑事詩』定本 第五五首
  - (15) 『日本雑事詩』定本 第五五首自注
  - (16) 『日本雑事詩』定本 第五七首
  - (17) 『日本国志』 七八八頁
  - (18) 『日本国志』 七八九頁
- ※本稿使用テキスト
- 『入境廬詩草』 上海古籍出版社 (一九八一年版)
  - 『日本雑事詩』 湖南人民出版社 (一九八一年版)
  - 『日本国志』 台湾・文海出版社 (民国七十年版)